

特集

誰もが生きやすい社会へ



ジェンダーから人権を考える

平成31年3月に策定した「マイセルフ品川プラン〜誰もが自分らしく〜」の策定検討委員会委員長である、立正大学教授、川^{かわ}眞田^{まいた}嘉壽^{かすこ}子^こさんにお話を伺いました。

大学では国際人権法、ジェンダー法などを専門とされていますが、国際人権やジェンダーについて関心を持ったきっかけを教えてください。

子どもの頃に「女の子だから」と制限をされたことが色々ありました。例えば私の小学校では、生徒会役員の選挙で、会長は男子、副会長や書記は女子と決められていました。選挙であれば女子でも当然会長にもなれる権利はあるはずなのに、なぜそのように最初から決められているのか、と疑問に感じたことがありました。大学時代にも、女性が活発に活動して目立つと揶揄される雰囲気があつて、当時「鉄の女」と呼ばれたイギリスのサッチャー首相みたくだと、半分からかいのように「サッチャー」というニックネームで呼ばれるようになりました。今ではこのニックネームは誇らしいくらいですが、当時は自分を否定されたような違和感がありました。

その後大学院に入って、「世界女性の憲

※ジェンダー…社会的、文化的に形成された男女の違い

ジェンダー・ギャップ指数 (2018) 主な国の順位

順位	国名	値
1	アイスランド	0.858
2	ノルウェー	0.835
3	スウェーデン	0.822
4	フィンランド	0.821
5	ニカラグア	0.809
6	ルワンダ	0.804
7	ニュージーランド	0.801
8	フィリピン	0.799
9	アイルランド	0.796
10	ナミビア	0.789
12	フランス	0.779
14	ドイツ	0.776
15	英国	0.774
16	カナダ	0.771
51	アメリカ	0.720
70	イタリア	0.706
75	ロシア	0.701
103	中国	0.673
110	日本	0.662
115	韓国	0.657

※内閣府男女共同参画局HPより

法」と呼ばれる女性差別撤廃条約※という人権条約を研究、普及するNGO団体に参加しました。そこで活動していくうちにそれまでの経験を背景に、国際人権やジェンダーに興味を持ち始めたのです。

日本以外での滞在経験を経て、それぞれの国で男女の違いや格差を実感したことなどは何かありますか。

イタリヤには、ヨーロッパの進んだ政治社会システムがありますが、カトリックの価値観の強い国なので、伝統的な家族のスタイルを大事にしているように感じましたね。

オーストラリアでは、日本と違って仕事はたいして定時に終了します。男性も仕事が終わるとすぐ家に帰って、家族と一緒に

夕食を作ったり、スポーツをしたりして過ごします。家庭生活において、家族みんながそろう時間があるのは当たり前のことですよ。父親が片道2時間かけて仕事に行つて、帰ってくるのはもう夜中で、平日はほとんど子どもと話ができないという事例がめずらしくない日本の生活とは全然違います。

行ったことがない国も含めて、ジェンダーの公認性が高い国はどこだと思いますか。

ジェンダーギャップ指数という、世界経済フォーラムが公表している男女格差を示すランキングがありまして、2018年のデータでは軒並み北欧の国が上位に入りま

※女性差別撤廃条約…男女の完全な平等の達成に貢献することを目的として、女性に対するあらゆる差別を撤廃することを基本理念としています。